

(写真：UNHCR/Kaoru Nemoto)

旧年中は大変お世話になりました。本年も引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

さて、ロック歌手の浜田省吾さん率いるチャリティー団体「J.S.Foundation」(<http://shogo.r-s.co.jp/js.html>)の協力のもと実施された太陽光発電街灯試験プロジェクトが成功裏に完了しました。

UNHCR は 2005 年末までかなりの量の灯油を調理用燃料として難民家庭に配布し、難民たちはこの一部を夜の明かりに使用していました。灯油価格の高騰などの理由から、UNHCR は 2006 年初めから調理用燃料を灯油からより安価な固形燃料に切り替えざるを得なかったのですが、キャンプには電気も通っていませんので、この影響で夜明かりとしてともすものがなくなり、難民たちは夜間の治安に不安を感じるようになりました。ニーズ調査として訪れた夜の難民キャンプは真っ暗で、闇の中を人々がうごめいていました。仮に灯油の配給を継続したとするとこれだけで 2006 年の事業費の 60%以上を占める計算になり（固形燃料に切り替えた結果、調理用燃料が事業費に占める割合は 20 数パーセントで済んでいます）、とても持続できるものではありませんでしたが、灯油の配給カットで凶らずも生じた治安面のニーズはないがしろにできるものではありません。

キャンプ一帯に電気を通すことは、費用の面や同じく電気が通っていない周辺地域などへの配慮などから論外（ただし、周辺地域は電気が通っていないものの、ここまで密集して人は住んでいません）。検討を重ね、費用対効果およびサステナビリティの点から太陽光発電パネルをキャンプ内に取り付け、街灯を設置したいと提案したところ、「J.S.Foundation」の佐藤事務局長が快諾していただき、UNHCR と協力関係にある NGO の Lutheran World Federation (LWF) の事業として、7つあるキャンプの1つで試験的にこのプロジェクトを実施することができました。先日このキャンプを夜視察して難民たちにインパクトを聞いたところ、反応は上々。特に女性・女子から「夜間少し安心して、外のお手洗いにいけるようになった」などポジティブな声が多く聞かれました。



キャンプ内に設置された太陽光発電街灯



太陽の力で難民の方々に安心を

光発電による街灯を全面的に設置し、太陽の力で安心を届けるというプロジェクトを実施するのは画期的なことです。

街灯の強さや向きについて改良の余地がありますが、試験プロジェクトで学んだ教訓をもとに、今年 UNHCR の事業として本格的にすべてのキャンプで太陽光発電街灯プロジェクトを実施する計画です。一度設置するとその後のメンテナンス費はほとんどかかりませんので、単純計算で難民一人あたり 90 円ほどで何年にもわたっていくばくかの安心を届けられる計算になります。灯りは多くのキャンプで課題となっていますが、UNHCR にとっても太陽

治安の問題やコミュニティー内の軋轢は、難民保護を預かる我々が最も心を砕く問題です。ブータンから人々が逃れて早 16 年。難民状況が長期化し、ブータンへの帰還について解決の糸口が見出せない中で、アメリカやカナダなど伝統的な難民第三国定住受け入れ国がブータン難民を大量に受け入れる姿勢を示しているのですが、ネパール政府は「まずはブータンへの帰還を」というこれまでの方針を崩さず、まだ大量の第三国定住にはゴーサインを出していません。また、難民の中には、今の段階ではブータンへの帰還以外のオプションはありえない、第三国定住に応じて他国に行くことはブータンの思惑にはまることだなどと声高に叫ぶ強硬派もあり、意見の違う難民たちへの締め付けを行い、治安問題に発展することも。こうした非常に複雑な状況を常日頃からモニターし、異なる意見を持つ様々なグループと話し合い、必要とあれば政府当局などとも協力して介入するのも、UNHCR の大事な仕事です。

2007 年 1 月 25 日

UNHCR ネパール・ダマク事務所長  
根本 かおる